

『百舌鳥国文』第十七号発刊に寄せて

著者	竹下 豊
引用	百舌鳥国文. 17, p.1-2
URL	http://hdl.handle.net/10466/14048

『百舌鳥国文』第十七号発刊に寄せて

竹下 豊

平成十七年四月一日、大阪府立大学・大阪女子大学・大阪府立看護大学の大阪府立三大学を統合した公立大学法人大阪府立大学が発足した。その新大学の構想の過程において、人文社会科学系で一学部を作ることを設置者の大阪府に認めてもらってから、大阪女子大学の人文社会学部と大阪府立大学総合科学部の文系との間で協議を始め、途中から大阪府立大学社会福祉学部も参加して、紆余曲折はあったものの、新たに人間社会学部が誕生した。

この間の協議に私は深く関与することになったが、歴史や学風などの異なる三部局が一緒になるのだから、学部・学科の枠組やその名称、果ては学科を並べる順番まで、すんなりいくはずはなかった。その激しい綱引きの中で、まず学科として言語文化学科を設け、真つ先に日本語文化化学コースを立てることが決まったのは、大阪女子大学の国文学科（改組後は人文学科日本語日本文学専攻）の伝統と実力が認められたということであろう。その伝統を築き、受け継いでこられた先輩の先生方や大学院の修了生、卒業生の皆さんには、感謝の言葉もない。その日本語文化化学コースは大阪女子大学の教員九名と大阪府立大学の田中宗博教授の一〇名で出発した。

新学部の枠組の協議の最中に、これからは新しいコースの上に博士課程（言語文化学専攻日本語文化学分野）も設置されることであるから、きちんとした学会を設立し、学部学生も会員として裾野を広げ、同窓会的な役割も持たせるとともに、研究発表を主とする年一回の大会の開催や学会誌を出すことも考えてはどうだろうかということ、私は教室の同僚諸氏に提案した。幸いに皆さんの御賛同を得て準備を進め、研究者として活躍している大阪女子大学の卒業生や大学院修了者などに案内を送付したのは、昨年六月であった。

そして、「大阪府立大学日本語文化学会」の第一回大会を開催したのは、昨年の七月十八日の「海の日」である。当日は、公立大

学法人大阪府立大学の博士後期課程に入学した院生ふたりの発表のあと、大阪女子大学名誉教授の片桐洋一先生に『枕草子』の成立とその基盤」という題で御講演いただき、第一回目の大会としては、まずは順調なスタートを切ることができた。

その上で、この度の学会誌の刊行になるのであるが、学会誌の名称をどうするかということがまず大きな問題となった。新学部設置の協議の中で、諸般の事情により、コースの名称から国語学国文学あるいは日本語日本文学をはずさざるを得なかった私としては、学会誌にはその名称を入れないという思いは人一倍強かったのであるが、同僚諸氏も思いは同じだったようで、結局、大仙キャンパス（大阪女子大学）の教員が、来年三月に移るのも中百舌鳥キャンパスだということもあり、「百舌鳥国文」の誌名に落ち着いたのである。

『百舌鳥国文』は、これまで「大阪女子大学大学院国語学国文学専攻院生の会」が発行してきた研究誌である。私の手許のものによれば、『百舌鳥国文』第一号は昭和五十六年（一九八一）七月に発行されており、同年三月の修士課程修了者四名と在院生一名の論を載せたA5版二二頁の薄い冊子である。爾後、不定期ながら刊行を続け、昨年三月には第十六号を刊行している。この第十六号は「院生の会」の活動としては最後の記念的な号ということもあって、片桐先生の特別寄稿をはじめ、一六名の論文と『百舌鳥国文』総目次を収めたB5版一四八頁の冊子となっている。この『百舌鳥国文』の各号を見ると、版下は投稿者自らの作成、初期の頃の号には使うソフトやプリンターが異なるために、印刷面の統一がとれていないものもあるが、文字通り「院生の会」の汗の結晶である。その『百舌鳥国文』を引き継ぎ、発行所は（公立大学法人）大阪府立大学日本語文化学会に変更して、この度、第十七号を発行する運びとなった。今後、年一回の発行を予定している。

現在、全国の大学から日本語日本文学関係の学科が消えつつあり、また、研究環境もこれから研究者を目指す学徒にとって良好な状態にあるとはいえない。「後発」の私どもにとって研究者の育成は重い課題であるが、日本語文化学会の発足を機に、会員一同、力を合わせて『百舌鳥国文』を発展させ、日本語日本文学の研究に一石を投ずるような論考の掲載を目指したい。別に刊行される日本語文化学会の紀要ともども大方の御支援をお願いする次第である。

最後に、大阪女子大学御退職後も御支援たまわり、本号にも玉稿をお寄せいただいた上に、日本語文化学会発足の基金として多額を御寄付くださった片桐洋一先生にお礼を申し上げて、年長者故に初代会長を務めることになった私の巻頭言の結びとしたい。